

## 「精」の概念をめぐる西医東漸における中国解剖学用語の変遷

松本秀士

### 提 要

“精”在中国传统医学上是最重要的概念，它在中国传统身体论和生命观上发挥了核心性的作用。而在西医东渐时期，以西医解剖学为主的价值观，来排除一些中国传统医学上“精”的概念。本稿，对西医东渐时期“精”的历史性解剖学用语进行分析，来讨论中国近代医学史上“精”概念的动态和其意义。

### 0. はじめに

中国伝統医学は古くより独自の身体論を基礎にして、独特の鍼灸・漢方治療を展開しながら、その医療文化を支えてきた。そして、周辺の漢字文化圏の医療にも大きな影響をおよぼしてきた。近代に起きた西医東漸によって西洋の解剖学が移入してくると、中国伝統医学独自の身体論はその本質的意義が明らかにされないままに、西洋的価値観によって一方的に批判され、特に日中両国ではそれぞれ政治的に医療制度上から排除されようとした歴史をもつ。かつての漢字文化圏では専ら中国発祥の伝統医学による独自の身体論によって、人の生命が理解されてきており、それは少なくとも今日の日中両国で用いられる解剖学用語にも反映されている。つまり、今日の日中両国では主に西洋発祥の解剖学を基礎としてはいるが、そこで用いられる解剖学用語をみれば、西洋解剖学的視点によって切り捨てられようとした中国伝統医学独自の身体論によるものが色濃く残っている。東西の相容れない身体思想の狭間の中で、今日の日中両国で用いられているいくつかの重要な解剖学用語は、不合理的に定められているのである<sup>1</sup>。

中国伝統医学独自の身体論の中には、生命の最も根幹に係わる概念として「精」があり、これはしばしば「氣」の概念と同等に論じられてきた。両語には様々な含意があり、中国伝統医学独自の身体論・生命観を醸し出してきた核心的概念でもある。そして、近代中国におきた西医東漸において、最も言語文化的摩擦の渦中にあつた語でもある。本稿ではそのことを踏まえて、西洋解剖学の概念の移入にともなうつくられた「精」をめぐる訳語の変遷について、医史的視点を交えながら検討したい。

## 1. 中国伝統医学における「精」の原義

中国伝統医学は『素問』『靈枢』の両書を、最古の經典と位置づけて発展させてきた。両書には中国伝統医学独自の身体論に関するまとまった記載があり、近代中国における西医東漸にともなう西洋解剖学の移入に関して解剖学用語を医史的に論じる上で、両書は最も重要な位置づけにある。このため、まず両書における「精」「氣」、あるいは「精氣」の概念を整理しておきたい。

『素問』金匱真言論篇第四には「夫**精**者、身之本」、『靈枢』経脈第十には「人始生、先成**精**」とあり<sup>2</sup>、「精」が身体、あるいは生命の最も根本的存在であることがわかる。

『靈枢』決気第三十には「人有**精氣津液血脈**…意以為一**氣**耳」とあるように、「広義の**氣**」として「精」「氣」「津」「液」「血」「脈」があげられている。中国伝統医学ではしばしば「精」と「氣」は「精氣」、「津」と「液」は「津液」、「血」と「脈」は「血脈」として論じられており、『素問』『靈枢』においても「精」と「精氣」とは厳密な区別なく論じられている。『素問』金匱真言論篇第四には「五藏者、藏**精氣**而不寫也」とあり、「五藏」の最も基本的機能が「精氣」を貯蔵することにあると捉えられていることがわかる。ここで、「五藏」とは肝・心・脾・肺・腎を指す。

「精氣」の由来は、『靈枢』小鍼解第三に「水穀皆入于胃、其**精氣**上注於肺、濁溜于腸胃」とあるように「水穀」、すなわち飲食物であり、これから「濁」なる成分が除かれることで生じるのが「精氣」であることが述べられている。従って、この記述では、「精氣」が飲食物から得られる各種栄養素や水分等を含む概念として論じられていることがわかる。また、『靈枢』五癰津液別第三十六に「五穀之**精液**、和合而為膏者、内滲入于骨空、補益腦髓、而下流于陰股。」とあるように、「精氣」には「精液」の呼称もある。各種栄養素等を含む概念としての「精氣」については、『靈枢』營衛生会第十八に「**營衛**者、**精氣**也」「人受氣于穀…五藏六府、皆以受氣、其清者為**營**、濁者為**衛**、**營**在脈中、**衛**在脈外」とあるように、身体内で「營」「衛」として各々その機能を発現すると捉えられていることがわかる。そのように『素問』『靈枢』を読み解けば、「營」とは主に身体内の脈を循環しながら栄養作用を司るものであり、「衛」とは主に身体内の脈から遊離して、「邪」から身体を守る免疫的作用を司るものであり、両者ともに「水穀之氣」、つまり飲食物から得られる「精氣」を根源とするものであることは明らかである<sup>3</sup>。従って、これらの「精」は今日的な解釈では、少なくとも身体内をめぐる乳糜・リンパ液・血漿を含むものであることがわかる。

一方、『靈枢』刺節真邪第七十五には「莖垂者、身中之機、**陰精**之候、**津液**之道也」とある。「莖垂」とは男性生殖器の陰莖を指し、ここでいう「津液」は小水だけでなく、広くは「陰精」

すなわち精液を含めた概念をもつ語である。

先にあげた『靈枢』決気第三十にある「人有精氣津液血脈…意以為一氣耳」の記述が示すように、「津液」は広義の「氣」の一つであり、これは飲食物由来の「精氣」から生じるものである。『靈枢』邪客第七十一には「營氣者、泌其津液」とあるように、「津液」が直接的には「營氣」(すなわち先出の「營」)から生じるものであることがわかる。そのように『素問』『靈枢』で「津液」は、広く体液を指す概念として論じられている。

ここで注目したいのは「陰精」の熟語であり、これは特に今日いう精液を指すものであることだ。また、『素問』上古天真論篇第一には「醉以入房、以欲竭其精」とある他、「丈夫…二八腎氣盛、天癸至、精氣溢寫、陰陽和、故能有子」とあるように、精液を指す語として「精」あるいは「精氣」が用いられている。あるいは、『素問』『靈枢』に次ぐ中国伝統医学の経典として伝えられてきた『難経』をみれば、三十六難に「腎兩者、非皆腎也、其左者為腎、右者為命門、命門者…男子以藏精、女子以繫胞」とあり<sup>4</sup>、二つある腎の内、右側が「命門」であるとした上で、それが「胞」すなわち女性生殖器の子宮に直接的につながりをもつものとされている。つまり、「胞」は男性における「精」を蔵する機能と同格にして論じられている。このこと等から、中国伝統医学の流れでは、しばしば単独の「精」の呼称でも精液の意で用いられてきている。さらに、今日に伝わる中国最古の本草書『神農本草経』をみれば、五味に「勞傷羸瘦、補不足、強陰益男子精」とあるように<sup>5</sup>、「精」が特に精液を指すものであることを明確に示した「男子精」の語も用いられている。

以上のように、中国伝統医学の経典『素問』『靈枢』における「精」の含意には、少なくとも今日いう①細胞、②乳糜・リンパ液・血漿、③精液の概念が含まれ、本稿では以下これらの含意を焦点にして、それと概念的なつながりをもつ西洋の解剖学用語の中国語訳について、その変遷を中心に検討したい。

すでに論じてきたように、『素問』『靈枢』にみる様々な解剖学的概念をもつ「精」は、その概念に応じて特別な語で言い換えられている。それらの語の中には、今日の解剖学の何れかの概念に通じるものがあり、その対応を本稿末の表1~2にまとめた。

なお、上述した『素問』『靈枢』における「精」の含意以外に「精神魂魄」、すなわち精神活動に係わるものがあるが、いわゆる解剖学の対象からは外れるため本稿では除外した。

## 2. ホブソンにおける「精」の語彙

近代中国における宣教活動のパイオニアとして知られる英国人宣教師モリソン(Robert Morrison 1782~1834 中国名; 馬礼遜)は、彼に続く宣教師のために1819~1823年にかけて一連

の『華英字典』を編纂している<sup>6</sup>。はじめに、『華英字典』において中国伝統の「精」の概念が、どのように捉えられていたかを示しておく。「精」の見出し語には“true ether; spiritual; subtile fluid; essence; essential; the semen of animals; pure”とある。これを前述の『素問』『靈枢』における概念と照らし合わせると、①の細胞については該当せず、②の乳糜・リンパ液・血漿は“subtile fluid”の範疇にあり、③の精液は“the semen of animals”に当たる。『華英字典』全体をみれば、西洋の医学用語についてはごく一般的な語彙が取り上げられるのみであり、中国伝統医学で用いられる語彙についても充分考慮したと言い切れるものではない。つまり、モリソンによる『華英字典』は一般的な漢語にある「精」の含意を捉えたものであるのだ。

近代中国における西洋解剖学伝播の起点的役割を果たしたとされるのが、英国人医療宣教師ホブソン(Benjamin Hobson 1816~1873 中国名; 合信)であり、次に西洋の解剖学用語の中国語訳を焦点にホブソンの編纂した『全体新論』(1851)、および『医学英華字釈』(1858)をみたい<sup>7</sup>。

『全体新論』小腸経には「吸管者。吸喻食物之精液管也…食物由胃至小腸頭。即与胆汁甜肉汁会合。漸落漸榨[自注; 榨者。取榨油榨糖之義。意謂榨食物之精液也]榨出精液。色白如乳。衆管吸之」とあるように、食物が胃、小腸を経ることで消化され、そこから小腸においてリンパ管(乳糜管)に移行するもの、すなわち乳糜に対して「精液」の訳語を用いていることがわかる。『医学英華字釈』食物消化功用をみると“the rest is digested into chime.”の見出し語に「餘在胃中化為糜」、その後にある見出し語“it separates into a fine and coarser part.”には「此处分別精液渣滓」、その直後の見出し語“the finer portion is white like milk.”には「精液色白如乳」とあるように、直接「精液」に対応する原語は“fine”ないしは“the finer portion”である。ホブソンのいう「精液」に対応する医学用語としては、西洋の同時代の解剖生理学書をみる限り chyle(乳糜)が一般的である<sup>8</sup>。『医学英華字釈』食物消化功用を振り返ると“the chyle there enter into the circulation.”の見出し語があり、「津液入運行之血」と説明される。つまり、ここでは乳糜に対して「津液」の訳語が与えられており、異同がみられる。

続いて、リンパ液に対する訳語をみると、『全体新論』小腸経に「一切吸管。附近脊處乃合為一。名曰精液總管[自注; 在腰骨第二節]附脊骨而上。至頸骨第七節。即屈轉而下。左入頸手廻血管管」とあるように「精液」である。「吸管」とは乳糜管、ここでいう「頸手廻血管管」とは左頸部静脈角を指すとみられ、従って「精液總管」とは胸管を指すものであることがわかる。「精液」の語は厳密には「精液總管」の熟語の中で用いられたものであり、『全体新論』では直接的にリンパ液に対する訳語は定められていない。一方、『医学英華字釈』では廻血大小管の“the thoracic duct”の見出し語に「吸液總管」とあり、リンパ液に対する直接の訳語は見あたらない。「吸液總管」は今日いう胸管のことであるから、先の『全体新論』の「精液總管」とは異なる

訳語が与えられたこととなる。「吸液総管」の語の「吸液」とは乳糜・リンパ液を吸い上げるという乳糜管・リンパ管の機能を表している。しかし、その「液」が具体的に何を指すかは表現されてはおらず、結局、リンパ液を直接に指し示す訳語は『医学英華字釈』では定められていない。

続いて、血漿に対する訳語をみると、『全体新論』血論に「以顕微鏡頭之。見血内有二物。一為明汁。一為粒子…凡明汁之内。又有数物。一為蛋青。一為肉絲…」とあるように「明汁」である<sup>9</sup>。『医学英華字釈』には血運行功用で、serum(血清)に対して「黄水」とあるだけで、「明汁」の語は出てこない。

ホブソンは一方で「精」を今日いう精液の意で用いている。その例は『全体新論』陽精論に「精者血脉所生。液之精奇者也。以顕微鏡照驗。見精内有活物甚多。状如蝌蚪而長尾」とあるように、顕微鏡を用いて「精」を観察したとき、その中にみられる「活物」は甚だ多く、形状はオタマジャクシ様であると説明している。つまり、「精」は今日いう精液に対しての訳語であり、精子のことではない。そのことは、『医学英華字釈』全体津液に“the semen”の見出し語があり、「外腎津液即精」と説明していることからわかる(ここで「外腎」とは睾丸を指す)。しかし、『全体新論』陰経には「夫婦交媾。男精洩入子宮」、同書胎論には「精出無勢。精水稀淡」とあるように、精液を「男精」「精水」とも呼称しており、訳語としてはゆらぎが多々みられることに注意が必要である。

精液中の精子については、先のように「活物」と説明している他、前出の『全体新論』陰経「夫婦交媾。男精洩入子宮」に続いて「子核感動。精珠逆列。陰精与陽精交会」とあり、「陽精」の訳語を与えたものとみられるが、『医学英華字釈』には該当する見出し語はなく、単に精液を指して「陽精」と呼称した可能性もある。いずれにせよ、前述したように『靈枢』における精液の呼称「陰精」とは全く逆の位置づけとなっており、ホブソンはそのことを全く考慮せずに、専ら男一女の対立上という陽一陰を「精」に対応させて「陽精」の訳語をつくっている。そのことは、『全体新論』陰経をみると「子核者在子宮左右約離一寸。向内有蒂与子宮相連。向外有筋帶与子宮相繫。形如雀卵。薄膜裹之。内有精珠十五顆至十八顆不等。其質甚薄。剖而看之。内貯精液。是為陰精。女子入月之年。精珠始生」とあるように、卵胞の内容物、すなわち卵子を含む卵胞液等を「陰精」と呼称していることからわかる(文中、「精珠」は卵巣内の卵胞を指す)。

一方、精液中の精子を除いた液体成分、すなわち精漿についてみれば、『全体新論』外腎経で「精中白水」と説明するが、『医学英華字釈』には該当する見出し語はない。

次に、卵巣・卵胞に対する訳語をみれば、『医学英華字釈』には婦科名目に“the ovarian vesicles”

の見出し語があり、「子核内精珠」と説明するのみである。「子核」とは今日いう卵巣のこと、「精珠」は今日いう卵胞のことであるが、卵巣については同書婦科名目では他に“the ovaries”の見出し語に「子宮左右核」とあり、「子核」を二字熟語として明確に訳語に定めたとは言い切れない状況にある。

ところで、前述の『全体新論』陽精論には「精者血脉所生。液之精奇者也」とあるように、ここで論じられる「精」(すなわち今日いう精液; semen)が、摂食物の消化によって得られる「精液」(すなわち今日いう乳糜; chyle)と異なるものであることは一応は喚起されてはいる。しかし、卵子を含む卵胞液についても「精液」と呼称していること、今日いう精液 semen に関しては「精」をはじめ「陽精」「男精」「精水」等の様々な呼称が無造作に用いられていることもあり、『全体新論』が訳語確立という意味では全く用を為していないことがわかる。そして、その曖昧さゆえに、初学者にとっても『全体新論』で説明される西洋医学の重要な概念は、正確に把握しづらいものであったといわざるを得ない。

なお、『全体新論』陰経において、今日いう受精卵に相当するものについては「胚珠」の呼称を用いているが、少なくとも『素問』『靈枢』ではこの語は出てこない。『説文解字』をみれば「胚」については「婦孕一月也」とあり、「珠」については「蚌之陰精」とある<sup>10</sup>。「婦孕一月」ではまだ胚胎の状態にあることを意味する。「蚌」はドブガイ、「珠」は真珠を意味し、中国では古くよりドブガイから真珠がとれることが知られていたのである。そのことは後世にも受け継がれており、明代の『天工開物』(1637) 珠に「凡珍珠必産蚌腹。映月成胎。經年最久。乃為至宝」と記される<sup>11</sup>。そこにはさらに「凡蚌孕珠…取月精以成其魄。中秋月明。則老蚌猶喜甚」とあるように、十分に成熟したドブガイが「月精」を受けて孕むものが「珠」であると捉えられていることがわかる。また、「老蚌生珠」の成語があるように、「珠」には「子」の含意がある<sup>12</sup>。「胚珠」の語はそうした背景からつくられたと考えられる。あるいは、中国伝統の人の原始の状態としての「胚」の概念に、受精卵の形態的イメージに若干のつながりをもつ「珠」を配してつくられたとも考えられる。

いずれにせよ、シュライデン(Matthias Schleiden, 1804~1881, 独)によって説かれた植物に関する細胞説(1838)、シュワン(Theodor Schwann, 1810~1882, 独)によって説かれた動物に関する細胞説(1839)<sup>13</sup>、つまり、動植物の生命の最小単位が細胞にあるという、近代西洋科学の中でも最も重要な考え方は、『全体新論』には盛り込まれてはいない。

### 3. 『全体闡微』『全体通考』における「精」の語彙

近代中国に概要にとどまらない、真の意味で本格的な西洋解剖学がもたらされるのは、漢訳

解剖学書『全体闡微』(1881)、あるいは『全体通考』(1886)の刊行を待たなければならない<sup>14</sup>。両書ともに当時、英国の解剖学を牽引したグレイ(Henry Gray, 1825～1861)による『解剖学 記述と外科』(初版 1858)をもとに編訳されている。『全体通考』には発生学に関する記述がないことから、『全体通考』が発生学を盛り込んだ総論(*general anatomy*)の章立てをもつグレイの原書第五版(1869)よりも古い版に基づいたものであることがわかる。一方、『全体闡微』は発生学に関する記述があるグレイの原書第八版(1877)に基づいたものであることには注意が必要である<sup>15</sup>。本稿においても『解剖学 記述と外科』初版(1858)、同書第二版(1860)、第五版(1869)、および第八版(1877)で検討し<sup>16</sup>、『全体通考』で訳された解剖学の内容が初版、および第二版の内容にほぼ合致していることを確認した。つまり、刊行年では『全体通考』が『全体闡微』よりも新しいが、原書の版では逆に『全体闡微』の方が新しい版をもとにしている。従って、当時の解剖学の流れとして発生学を盛り込んでいったことは、医史的に非常に重要な意義があることから、近代中国にとっても『全体闡微』が最新の発生学を盛り込んだグレイの原書を用いたことは非常に重要なこととなる。

当時の西洋医学史の流れでは、シュライデン、シュワンによる細胞説をさらに発展させて、フィルヒョー(Rudolph Virchow, 1821～1902, 独)が、「すべての細胞は細胞から(*Omnis cellula e cellula*)」であることを説いた(1858)<sup>17</sup>ことが、今日一般に重要視されている。そして、グレイの『解剖学 記述と外科』初版が同年に刊行されるが、これに細胞説に基づく記述が盛り込まれるようになるのは、本稿で確認した限り第五版(1869)以降である。

はじめに、その細胞説を盛り込んだグレイの解剖学をいち早く中国に伝える役割を果たした、米国人医療宣教師オスグッド (Dauphin William Osgood, 1845～1880 中国名 ; 柯為良)ら編訳による人体解剖学の専門書『全体闡微』(1881)についてみたい。『全体闡微』巻一総論には珠論の節として以下の記述がある。

生類之中。所以能化生成形者。有一至宝至要。極精極微之物曰珠。茲就人身而論。凡皮膚。筋。骨。臟腑等物。皆由此珠而成…(中略)…由父母交媾之精珠。如混沌未開。其分也。如太極生兩儀。一而二。二而四。四而八。愈分愈多

上の記述中で「珠」は細胞、「父母交媾之精珠」は受精卵を意味することが文脈からも明確である。「一而二。二而四。四而八。愈分愈多」とは受精卵に起こる卵割を表現しており、『全体闡微』では独自にそれを中国伝統の太極の原理、つまり、『易経』繫辭伝にある「易有太極、是生

兩儀、兩儀生四象、四象生八卦」の記述<sup>18</sup>になぞらえて「如太極生兩儀」と比喩している。そうした発生学に関する記述は少なくともグレイの原書初版、および第二版ではみあたらず、第五版以降に盛り込まれる総論(General anatomy)の中で論じられている。

続いて、『全体闡微』における乳糜・リンパ液に関する記述をみると、吸管功用論に「吸管。以其能吸摂津液也…在小腸起者。曰養汁管。内藏養汁。白如乳…在他处者曰吸管。只藏明汁」とあるように、乳糜管は「養汁管」、乳糜は「養汁」の訳語としている他、リンパ管は「吸管」、リンパ液は「明汁」の訳語としており、乳糜・リンパ液を広義の体液として、中国伝統医学の「津液」の概念に相当するものと捉えている。従って、ホブソンが用いた乳糜に対する「精液」の訳語は、完全に排除されていることがわかる。

『全体闡微』巻一総論には、原書第八版の総論の内容を反映して、血液に関する記述がある。そこには「血汁色微黄。経煮即凝結。血汁中更有肉絲[自注;西名非布里尼]少許」とあるように、血漿に対して「血汁」の訳語が与えられている<sup>19</sup>。

続いて、『全体闡微』における精液に関する記述をみると、巻五精囊論に「精色白。内有三件。一為精液。無色通明。経煮即稠。一為精珠。列四千粒。只一寸。一為動物。形如蝌蚪。名曰生元。五百箇長只一寸」とあるように、精液は「精」、精漿は「精液」、精子は「生元」の訳語としている<sup>20</sup>。つまり、『全体新論』で曖昧に説明されていた精液中の主要成分について、『全体闡微』では明確に示されていることがわかる。

続いて、卵子・卵巣に関する記述をみると、巻五陰具論陰経に「陰経分内外…内者曰陰道。子宮。卵核。卵管」、同論卵核に「網内藏多卵泡…中藏卵」とあるように、卵巣には「卵核」、卵泡には「卵泡」、卵子には「卵」の訳語が与えられている。つまり、『全体新論』で「精」の語を基本とした訳語、すなわち、卵泡に「精珠」、卵子に「陰精」の訳語を用いていたことから全くの一新を図っていることがわかる。

卵子の原語は ovum であり、原義は鶏卵 egg である<sup>21</sup>。グレイの原書では、ヒトの卵子については、卵黄を中心に卵割することが論じられており<sup>22</sup>、ovum が鶏卵と同形態であるという明確な認識が伺え、それは西洋の発生学でも ovum の中の構造が早くから知られていたことを反映したものである。そのことを踏まえれば、ホブソンによる「精」を用いた訳語が排除されたことは、ごく自然な判断であったといえる。

次に、英国人医療宣教師ダッジョン(John Dudgeon 1837~1901, 中国名; 徳貞)が編訳した『全体通考』についてみたい。先述の通り、『全体通考』では細胞を専門に論ずる記述はみられないが、総論として発生学に関する内容が盛り込まれる以前のグレイの原書が、骨学や内臓学の中



でごく断片的に骨細胞・肝細胞等として論じていることを反映させており、巻一論骨に「骨泡」、巻十一論消化之具にある肝臓に関する記述の中に「肝泡作每小葉之大半」とある。つまり、骨細胞には「骨泡」、肝細胞には「肝泡」の訳語が与えられているが、細胞のみを取り上げての論述はみられず、単独の細胞に対しても明確には訳語が与えられていない。従って、『全体通考』では細胞に相当する訳語として「泡」が用いられてはいるが、それはあくまで熟語を構成する一語としてのものであり、先述の『全体闡微』が単独の細胞に対する訳語を定めたこととは一線を画すものである。

続いて、『全体通考』における乳糜・リンパ液に関する記述をみると、巻七津液管に「津液管。因其管中含津液故名。又名吸管。以其能吸養血之物以入血。而以其功用為名。其管不但有管与其穿過之核。並有養汁管。別名乳糜管。此乳糜管即小腸之津液管。与各津液管相同。惟於消化之時其所含者。乃白乳之汁。即乳糜」とあるように、やはり広義のリンパ液を中国伝統医学のいう「津液」と同等に捉えて、これを訳語としている。乳糜については「白乳之汁」と説明しながら「乳糜」の訳語を与えている。グレイの原書第二版に照らし合わせれば、それらの原語は「津液」が *lymph water* であり、「乳糜」が *chyle* である。さらに、巻十一論消化之具をみれば「凡飲食入胃。則由減而化。再往下則入小腸。而飲食養身之物即乳糜」とあるように、乳糜の機能が「養身」にあることが充分認識された上で、その形態面での特徴をとって「乳糜」の訳語が与えられていることがわかる。なお、グレイの原書では総論の中でのみ血液成分に関して論じており、従って、総論が加えられる前のグレイの原書を底本とした『全体通考』には血漿に関する記述はなく、血漿に対する訳語もみられない。

続いて、『全体通考』における精液に関する記述をみると、巻十五論陽生具に「辜丸。乃兩小核形生精之具…其精係稠白異味之液。乃液。即精水。実点。即精米粒。乃精虫之所為。其精液。乃透明無色。卵清之物。…精虫或精絲。為生孕必須之物」とあるように、文脈から判断する限り、先の『全体闡微』の同様の記述と合致する<sup>23</sup>。従って、精液には「精」、精漿には「精水」、顆粒球には「精米粒」、精子には「精虫」あるいは「精絲」の訳語を与えていることがわかる。

続いて、『全体通考』における卵子関係の記述をみると、巻十六論女生子之具 子宮の節に「子宮。為受孕之具。其內收納陽精所感之卵。即陰精珠。留而輔助其胎之時發」、同論子宮附物の節に「子宮。所属之物。乃經管。經核…其經管。引陰精珠…此核体内。有許多顕微鏡可看之囊。而微生物精珠」、そこには見出し語として「經珠之裏」とある。つまり、受精卵に相当する概念には「陰精珠」、卵巣には「經核」、卵子には「精珠」あるいは「經珠」、卵胞には「經珠之裏」の訳語が与えられていることがわかる。なお、ここでは精子に対して「陽精」の訳語を用いており、先と異同がみられる。グレイの原書第二版でそれらの原語に照らし合わせれば、「陰精珠」

は fecundated ovum、「経核」は ovary、「精珠」「経珠」は ovum、「経珠之裏」は Graafian vesicles である。

#### 4. 『医学辞彙』にみる「精」の語彙

清末の中国において最も組織だった医療活動を展開したのは博医会(China medical missionary association, 創立; 1886)で、その当時の医療宣教師達の求心的役割を果たした。それまで、来華の医療宣教師らによって様々な漢訳西洋医学書が編纂され、それらの各書において逐一、西洋の解剖学用語に対する中国語訳は改められてきた。そして、事実上英国人医療宣教師コースラン (Philip Brunelleschi Cousland, 1861~1930, 中国名; 高似蘭) の手によって、はじめて総括的な英中医学辞書『医学辞彙(初版)』(1908)が編纂されたのである。同書は、いわば清末における西洋の解剖学用語に対する中国語訳の集大成的存在である。その背景には、それまで西洋での解剖学用語が各国でまちまちであったことから、それを統一するために1894年にバーセルの解剖学協会にて最初の国際解剖学用語 Basel Nomina Anatomica (B. N. A.) が承認され、翌年にこれが出版されるに至ったことがあり<sup>24</sup>、その直後に編纂された英中医学辞書という点でも医史学的に重要である。

博医会は民国期に入ってから、中国語による解剖学用語の変化、あるいは和製漢語による解剖学用語を適宜反映させて『医学辞彙』の版を重ねている。本稿が焦点とする中国伝統医学の「精」の概念をめぐる変遷に関して、初版(1908)、第三版(1918)、増訂三版(1920)、および第六版(1930)を用いて<sup>25</sup>、以下では今日いうところの①細胞、②乳糜・リンパ液・血漿、③精液・精子、④卵胞・卵子について、その原語(英語)と訳語を示した(以下で「初」は初版、「三」は第三版、「増三」は増訂三版、「六」は第六版を表す)。

##### ① 細胞

cell, 初; **朧** 三; **朧**, 細胞 増三; **朧**, 細胞 六; 細胞

##### ② 乳糜・リンパ液・血漿

chyle, 初; 脂育汁 三; 脂育汁 増三; 乳糜 六; 乳糜  
lymph, 初; **漚** 三; **漚**, 体津 増三; 淋巴 六; 淋巴  
blood plasma, 初; 血汁 三; 血汁, 血漿 増三; 血漿 六; 血漿

##### ③ 精液・精子

semen	初; 精	三; 精, 精液	増三; 精, 精液	六; 精液, 精
spermatozoa,	初; 精 <b>散</b>	三; 精子, 精 <b>散</b>	増三; 精子, 精 <b>散</b>	六; 精子
liquor seminis,	初; 精汁	三; 精汁	増三; 精汁	六; 精液

## ④ 卵胞・卵子

ovisac,	初; 卵包, 卵囊, 卵脬	三; 卵包, 卵囊, 卵脬	増三; 卵包, 卵囊, 卵脬	六; 囊状卵泡
ovum,	初; 卵, 蛋	三; 卵, 蛋	増三; 卵, 卵子	六; 卵

『医学辞彙』で特筆すべきは、西洋の解剖学の概念を表現するために新たにつくられた漢字である。『医学辞彙 (初版)』にはそれら新造漢字についての語釈があり、以下にそれを示しておく (第三版にも同様に記される)。

<b>朧</b>	音朱 全身之組織微粒 cell
<b>逮</b>	音津 旧名吸汁即肉中之液 lymph
<b>散</b>	音薇 動植物生胚発萌之原活点 germ, spore

## 5. 日本経由の西洋解剖学の伝播における「精」の語彙

日本経由の西洋解剖学の伝播とともに和製漢語による解剖学用語を本格的に中国にもたらす役割を担うのが、丁福保 (1874~1952) が編纂した『新靈枢』(1908) である<sup>26</sup>。『新靈枢』において西洋の解剖学用語の原語はほぼ記されていないことから、以下には、①細胞、②乳糜・リンパ液・血漿、③精液・精子、④卵胞・卵子の各訳語を、その用例を抜き出して示した。

## ① 細胞

第一章 細胞篇 「欲講解剖学. 必先明十一種之細胞」

## ② 乳糜・リンパ液・血漿

第二章 組織篇 「乳糜 乳糜者. 為消化食物時. 在乳糜管内之液体. 状如乳汁. 白色而不透明. 能通過淋巴管. 而入於脈管. 以輸送於諸部」

第二章 組織篇 「淋巴液 淋巴液在淋巴管内. 為無色透明之液体.」

第十章 消化器生理衛生篇 「淋巴管於身体諸部含有淋巴液」

第二章 組織篇 「血液…其中含有血漿与血球」

## ③ 精液・精子

第二十章 生殖器解剖生理篇 「凡雄性之**精虫**，与雌性之**卵珠**，互相結合，而生新体，謂之生殖，使**精虫**与**卵珠**交接之器，謂之生殖器」「睾丸之機能，能使血液生至妙之運動，化為**精液**，經極細之精管，以運入輸精管，**精液**中有動物，形如蝌蚪，名曰**精虫**，為人類之萌芽，男子之有**精虫**，猶婦人之有**卵珠**也」

## ④ 卵胞・卵子

第二十章 生殖器解剖生理篇 「卵巢之機能 卵巢為製造**卵珠**之所…卵巢内之**卵種細胞**，亦漸次脱出，因剪彩之媒介，遂入於輸卵管」

以上のように、『新靈枢』において、細胞には「細胞」、乳糜には「乳糜」、リンパ液には「淋巴液」、血漿には「血漿」、精液には「精液」、精子には「精虫」、卵胞には「卵種細胞」、卵子には「卵珠」の訳語が与えられている。

なお、第十章 消化器生理衛生篇ではリンパ液に関する記述の他、「案靈枢経曰泌糟粕蒸津液化其精微，上注於肺脈乃化而為血以奉生身，莫貴於此，此説論食物化血之理，甚**精**」とあるように、『靈枢』におけるリンパ液を含む概念としての「精」に関する記述が併記されている。従って、丁福保は中国伝統医学における「精」の意義と、これとは無関係に専ら音訳によってつくられた和製漢語「淋巴液」とを冷静に見分けていたことが伺える。

## 6. 小結

中国伝統医学では身体に起こる生命現象の根幹的要素を、幅広く「精」の概念で捉えていた。ホブソンはそのことに一定の理解をもっていたことが伺え、「精」を用いた訳語を乳糜・リンパ液に対して与えていた。それは、中国伝統医学が飲食物を由来とする「精」を、身体内をめぐりながら生命現象を支える「營」「衛」等の「気」、すなわち「後天の精」と捉えていたことによるものである。しかし、後の医療宣教師の流れでは、「精」の語に対して専ら精液・精液成分を表す語としての方向性が与えられていった。中国伝統医学の「精」にはヒトの生命・身体の起源・根源としての意義、すなわち「先天の精」としての意義も備わり、精液の原語 *semen*、ないしは *sperm* の語源が何れも *seed* にあることが<sup>27)</sup>、それと結びついたと考えられる。「精」の語の使用こそは避けてはいるが、そうした解釈を最もよく表現したのが『全体闡微』にみる精子に対する「生元」の訳語であるといえる。

一方、細胞も中国伝統医学の「精」の概念の範疇にあるが、それには当初から「珠」の訳語

が与えられている。これは形態面を重視する西洋解剖学の特色を反映したものと考えられる。そのことは、卵胞・卵子に対しても、暫時的ではあるが「珠」の語を用いた訳語が与えられ、後には「卵」の語を用いた訳語が与えられていったこと、そしてその原語 *ovum* の語源が、早くから肉眼でその形態が確認されてきた *egg* であることから伺い知ることができる。

特定の形をもたない乳糜・リンパ液に対しては、「養汁」「脂育汁」の訳語が与えられている。乳糜の原語は *chyle* で、その語源は *juice* であり<sup>28</sup>、形態面からは「汁」、あるいは「脂」の語、そして機能面からは「養」「育」の意義をとってつくられた訳語といえる。そして、『医学辞彙 (初版)』では中国伝統医学の論じる体液全般を表す「津液」の概念、すなわち飲食物から生じる「精気」が、西洋解剖学の考えるリンパ液の機能と重なるという判断から、この語を反映させた **津** の訳語がつくられたと考えられる。同様に、血漿も特定の形をもたないという形態面から「汁」の語が用いられたと考えられる。

以上のように、中国伝統医学の「精」の概念に限定してみるならば、西洋解剖学独自の形態面、あるいは機能面での視点によって、新たな訳語に置き換えられていったことがわかる。しかし、そこには中国伝統医学で用いられてきた語彙に対しての詳細な分析、あるいは充分な解釈は行われておらず、専ら西洋医学の概念を中国語で如何に表現するかに力点が置かれていたことには注意が必要である。つまり、漢字のもつ意味には一定以上の注意が払われてはいるが、中国伝統医学の語彙体系・理論体系については充分な考慮がされないままに、西洋医学の移入と、その医学用語の訳語がつくられていったのである。

最後に本稿で中国伝統医学の「精」の概念を軸に検討した細胞・乳糜・リンパ液・血漿・精液・精漿・精子・卵胞・卵子に対する訳語の変遷を以下の表 1~2 にまとめた。本文で検討した各医書以外に、日本の杉田玄白による『解体新書』(1774)、奥山虎章による『医語類聚』(1872)、同編による『解剖生理学語部』(1881)<sup>29</sup>も重要史料として、これら三書にある訳語も併記した。

なお、表 1~2 中の角括弧 [ ] 内の漢字は一般に表記不可能なため、本文中に示した漢字を参照されたい(本文中にない[シ勿]の漢字は三水に勿である)。また、括弧内の単語は直接的に確定されたものではなく、間接的にそう判断されるものであり、不確定要素を含むことを断っておきたい。

表 1

現代日本語	細胞	乳糜	リンパ液	血漿
現代中国語	細胞	乳糜	淋巴液	血漿
『素問』 『靈樞』	精	精氣	精氣・營氣・衛氣	精氣・營氣・衛氣
『解体新書』	—	奇縷	水	[シ勿]乙
『医語類聚』	細胞体又空窠	乳糜	列印巴	—
『解剖生理学語部』	細胞体	乳糜	淋澆又痘漿	血漿
『全体新論』	—	精液	精液	明汁
『医学英華字积』	—	津液・精液	—	—
『全体闡微』	珠	養汁	明汁	血汁
『全体通考』	(泡)	乳糜	津液	—
『医学辞彙』 初版	[月朱]	脂育汁	[津血]	血汁
『医学辞彙』 第三版	[月朱], 細胞	脂育汁	[津血], 体[津血]	血汁, 血漿
『医学辞彙』 増訂三片	[月朱], 細胞	乳糜	淋巴	血漿
『医学辞彙』 第六版	細胞	乳糜	淋巴	血漿
『新靈樞』	細胞	乳糜	淋巴液	血漿

表 2

現代日本語	精液	精子	精漿	卵胞	卵子
現代中国語	精液	精子	精漿	濾泡	卵
『素問』 『靈樞』	陰精	(精)	(陰精) (精)	(精)	(精)
『解体新書』	精	—	—	小丸子	—
『医語類聚』	精液	精虫	—	—	卵子
『解剖生理学語部』	精液	精虫	—	卵胞	卵子
『全体新論』	精・陽精・男精・精(陽精)	—	白水	精珠	(陰精・精液)
『医学英華字积』	精	—	—	精珠	—
『全体闡微』	精	生元	精液	卵泡	卵
『全体通考』	精	精虫・精絲・陽精	精水	經珠之裏	經珠, 精珠
『医学辞彙』 初版	精	精[微]	精汁	卵包, 卵囊, 卵[月与卵, 蛋	—
『医学辞彙』 第三版	精, 精液	精子・精[微]	精汁	卵包, 卵囊, 卵[月与卵, 蛋	—
『医学辞彙』 増訂三片	精, 精液	精子・精[微]	精汁	卵包, 卵囊, 卵[月与卵, 卵子	—
『医学辞彙』 第六版	精液, 精	精子	精液	囊状卵泡	卵
『新靈樞』	精液	精虫	—	卵種細胞	卵珠

## 【註】

- その例として神経・動脈・静脈・リンパ管・腺等の解剖学用語を焦点に論じた松本(2008)参照。
- 本稿で『素問』は、『重廣補註黄帝内經素問』(四部叢刊. 明翻北宋本影印). 上海商務印書館; 1935 参照、『靈樞』は、『靈樞經』(四部叢刊. 明趙府居敬堂刊本影印)上海商務印書館; 1935 参照。
- 松本(2003), p. 111.
- 本稿で『難經』は、吳呂広注, 明王九思校正附音积『王翰林集注黄帝八十一難經』(四部叢刊. 日本刻佚存叢書本影印)上海商務印書館; 1935 参照。
- 本稿で『神農本草經』は、馬繼興主編『神農本草經輯注』(南宋本『大觀經史証類備急本草』、敦煌出土本『唐本草』等に基づく復原本)人民衛生出版社; 1995 参照。
- 本稿で『華英字典』は、Morrison R. A DICTIONARY OF THE CHINESE LANGUAGE IN THREE PARTS ; Printed at the Honorable East India Company's Press, (早稲田大学付属図書館蔵本原書影印. ゆまに書房; 1996)参照。
- 本稿で『全体新論』は、合信『全体新論』江蘇上海墨海書館蔵版; 1851 参照、『医学英華字积』

は、Hobson B. *A medical vocabulary in English and Chinese*. Shanghai Mission Press; 1858 参照。

<sup>8</sup> 例えば、Quain J.(1848), p. lxxxv. なお、同書はホブソンが医学を学んだ University College London で解剖学を担当した Quain R. と Sharpey W. が編者である。

<sup>9</sup> 文脈から「蛋青」はアルブミン、「肉絲」はフィブリンの訳語であることがわかる他、『医学英華字釈』血運行功用にある“The rest is flesh fibres, albumen, oil, & c.”の見出し語に「余為肉絲蛋青油等物」、「Flesh fibres is called fibrine」の見出し語に「肉絲番名費皮連」とあることから明らかである。

<sup>10</sup> 本稿で『説文解字』は、許慎撰『説文解字』(清同治陳昌治本影印)中華書店; 1963 参照。

<sup>11</sup> 本稿で『天工開物』は宋応星『天工開物』揚州広陵古籍刻印社; 1997 参照。

<sup>12</sup> この成語そのものの初出は不詳であるが、一般に、漢代の孔融『与韋端書』に「不意双珠近出老蚌, 甚珍貴之」、『北齊書』に「吾以卿老蚌遂出明珠」とある記述が典拠とされる。

<sup>13</sup> Schwann T. (1839); p. 2-6.

<sup>14</sup> 本稿で『全体闡微』は、柯為良『全体闡微』福州聖教医館蔵板; 1881 参照、『全体通考』は、徳貞『全体通考』同文館; 1886 参照。

<sup>15</sup> 松本(2007); p. 553-554.

<sup>16</sup> 本稿でグレイ『解剖学 記述と外科』は、初版が Gray H. *Anatomy, descriptive and surgical*, John W. Parker and son, 1858(Chartwell Books.Inc 1991 影印)、第二版は Gray H. *Anatomy, descriptive and surgical. second edition*. Philadelphia Henry. C. Lea.; 1867(1860 second edition reprint)、第五版は Gray H. *Anatomy, descriptive and surgical. fifth edition* edited by T. Holmes. London Longmans.Green. and.Co. 1869、第八版は Gray H. (1878)を参照。

<sup>17</sup> Virchow R. (1859), p. 25.

<sup>18</sup> 本稿で『易経』は、洪業等編纂『周易 毛詩 毛詩注疏引書』上海古籍出版社; 1986 参照。

<sup>19</sup> 『全体闡微』卷一総論にはまた「其凝結中。実者即肉絲。血輪相交粘合。辺稀者即血汁」とあり、「血汁」が血清の訳語としても用いられている。卷末の英-中対訳表では、serum(血清)に対して「血汁」とあり、plasma(血漿)に対する訳語は示されていない。原書第八版総論にある該当箇所ではごく概要ではあるが plasma, serum に関する記述がみられ、『全体闡微』では両者に明確な区別を施した訳語が与えられなかったこととなる。

<sup>20</sup> 「精珠」はその大きさ(1/4000inch=6.35 μ m)から精液中に含まれる顆粒球と考えられる。

<sup>21</sup> Online etymology dictionary, <http://www.etymonline.com/index.php>

<sup>22</sup> Gray H. (1878), p. 94-96.

<sup>23</sup> この内容は本稿で検討したグレイの原書初版・第二版・第五版・第八版の全てにみられる。

<sup>24</sup> 坂井(2008), p. 304-305.

<sup>25</sup> 本稿で『医学辞彙(初版)』は、Cousland P. B. *An English-Chinese Lexicon of Medical Terms*, Medical Missionary Association of China Shanghai; 1908 参照、『医学辞彙第三版』、および『医学辞彙増訂第三版』は、Cousland P. B. *An English-Chinese Lexicon of Medical Terms*, Medical Missionary Association of China Shanghai, third edition; 1918, Appendix to third edition of the English-Chinese Lexicon of Medical Terms, Medical Missionary Association of China Shanghai; 1920(第三版と増訂第三版との合本)参照、『医学辞彙第六版』は高似蘭 魯德馨合編『医学辞彙第六版』中国博医会; 1930

参照。

<sup>26</sup> 本稿で『新靈枢』は、丁福保編『新靈枢』第三版。上海文明書局; 1912 参照。

<sup>27</sup> Online etymology dictionary, <http://www.etymonline.com/index.php>

<sup>28</sup> Online etymology dictionary, <http://www.etymonline.com/index.php>

<sup>29</sup> 本稿で『解体新書』は、酒井恒訳編『ターヘル・アナトミアと解体新書』名古屋大学出版会; 1986、  
『医語類聚』は、奥山虎章『医語類聚』1872 (『明治期専門術語集』有精堂影印; 1985)、  
解剖生理学語部』は、奥山虎章『解剖生理学語部』名山閣; 1881 参照。

#### 【参考文献】

Gray H. Anatomy, descriptive and surgical.eighth edition edited by T. Holmes. Philadelphia Henry. C. Lea; 1878.

Quain J. Elements of anatomy fifth editon edited by Quain R. and Sharpey W. Taylor, Walton, and Maberly; 1848.

Schwann T. Mikroskopische Untersuchungen über die Uebereinstimmung in der Struktur und dem Wachsthum der Thiere und Pflanzen. Sander; 1839.

Virchow R. Die Cellularpathologie in ihrer Begründung auf physiologische und pathologisch Gewebelehre. Verlag von August Hirschwald; 1859.

坂井建雄『人体観の歴史』岩波書店; 2008.

松本秀士「中医学の原典『内経』の栄養学的理論」『境界を越えて』3号 2003; 105-123.

松本秀士「清末刊行の中国文人体解剖学書について」『日本医史学雑誌』53 卷 4 号 2007; 545-568.

松本秀士「中国における西洋解剖学の受容について」『或問』15 号 2008; 29-44.